

県内復興・経済日誌（2019年8月）

1日

《本県への移住相談件数が倍増》

本県に2018年度の1年間に寄せられた移住相談件数が過去最多の11,774件に上ったことが総務省のまとめで分かった。前年度の5,555件から倍以上に急増し、東北で最多、全国では7番目に多かった。県は相談件数の急増について、原発事故の影響が和らぎ、首都圏にほど近い本県の立地条件が再度見直されたことが背景にあると分析している。

2日

《「空飛ぶクルマ」で三重県と協定締結》

本県と三重県は、電動・自動で垂直に離陸して移動する「空飛ぶクルマ」の民間開発を支援するための協力協定を締結した。本県が技術研究や試験飛行の拠点を整備し、三重県が実証実験に最適な離島や山間部の飛行コースを提供する。内堀知事は、福島・国際研究産業都市（イノベーション・コースト）構想のさらなる推進と関連産業の集積に期待感を示した。

6日

《クレハ、研究開発機能をいわき市に移転》

クレハ（本社・東京都）は、2020年10月を目標に本社機能の研究開発部門を、東京都新宿区からいわき市錦町に移転させると発表した。同町には主力工場があり、生産と研究開発部門の一体化による業務の効率化や商品開発の向上を目指す。

8日

《「もろみ」風味の洋菓子が発売開始》

生キャラメル製造・販売で知られる向山製作所（大玉村）は、東京電力福島第一原発事故の影響などで販売を休止している玉鈴醤油（伊達市）の最高級醤油の長期熟成もろみを受け継ぎ洋菓子として商品化した。職人の技と思いが詰まった和と洋の結晶「もろみ醤油薫るラング

ドシャ」で福島の新しい味として発売を始めた。

《「相馬福島道路」2020年度に全線開通へ》

国土交通省東北地方整備局は、相馬市と福島市を結ぶ東北中央自動車道「相馬福島道路」（延長45.7km）を2020年度末までに全線開通すると発表した。相馬福島道路は、常磐道と東北道を結び、産業振興や観光交流拡大、救急搬送、物流円滑化などにつながり、復興を後押しすると期待されている。

9日

《首都圏で県産酒 PR イベント開催》

県産酒の魅力首都圏でアピールする県酒造協同組合の「ふくしま美酒体験 in 渋谷 FINAL」がセルリアンタワー東急ホテル（東京都）で開かれた。同組合の需要開発委員会が中心となって1998年から実施しており、22回目を迎えた今回が都内での最後の開催となった。過去最多の約1,200人が来場し、全国新酒鑑評会で金賞受賞数が7年連続日本一に輝いた県産酒を堪能した。

《いわき市、防潮堤を活用したサイクリングロード利用開始》

東日本大震災の津波で被害を受けたいわき市の海岸線の道路や防潮堤などを活用して整備が進められているサイクリングロード「いわき七浜海道」の一部区間の利用が始まった。同市によると、防潮堤を活用したサイクリングロードは東北でも例がなく、風光明媚な海岸線を生かした観光交流人口の拡大や市民らの健康増進を目的に、同市が整備している。

13日

《南相馬市小高区の食品スーパー、8年5カ月ぶり営業再開》

東京電力福島第一原発事故に伴い休業していた南相馬市小高区の「食品スーパーふるうち」が、総菜店「おはぎとおそうざい ふるうちの台所」に生まれ変わり、8年5カ月ぶりに営業

を再開した。看板商品だったおはぎが復活、用意していた60個がすぐに売り切れるほどの盛況ぶりだった。

19日

《県内人口、全7地域で減少》

県は2010年から2018年までの県内7地域別の人口推移をまとめた。地域別の減少率は、東京電力福島第一原発事故で住民避難が続く相双を除くと、南会津が15.4%と最大で、会津（8.6%）、県南（7.1%）、県中（4.6%）、県北（3.9%）、いわき（0.8%）の順だった。相双は12市町村のうち2015年国勢調査の対象外となった檜葉、富岡、大熊、双葉、浪江、葛尾、飯館の7町村が2018年の人口に含まれていないため減少率が47.6%と高くなった。

《広野産バナナ初収穫》

広野町振興公社は、同町二ツ沼総合公園で栽培してきたバナナを初めて収穫した。バナナ栽培地としては国内最北で、南国で育つバナナを同町で生産する意外性を武器に、町の新たな特産品として観光振興につなげたい考え。初収穫に駆け付けた内堀知事は「広野でのバナナ栽培はインパクトがあり、復興のシンボルになると期待した。

22日

《『全国燗酒コンテスト』県内3蔵元の4銘柄が最高金賞受賞》

温めた日本酒の味わいを競う「全国燗酒コンテスト2019」の審査結果が発表された。本県からは、お値打ち燗酒ぬる燗部門で花春酒造（会津若松市）「花春 濃醇純米酒」、同熱燗部門で同社「花春 辛口純米酒」、プレミアム燗酒部門で奥の松酒造（二本松市）「奥の松 辛口原酒」、特殊ぬる燗部門で笹の川酒造（郡山市）「秘蔵純米 25年古酒」が、最高金賞に輝いた。

26日

《7月期の県人口動態、5年ぶり社会増》

県が発表した推計人口（1日現在）によると、本県への転入者（2,516人）が転出者（2,415人）を101人上回り、7月期としては5年ぶりの社会増となった。県は、外国人研修生の増加など

が背景にあると分析しており、引き続き交流人口や関係人口の拡大に力を入れている。

《工場新設届け出件数、前年同期2件増》

県が今年1月～6月の工場立地状況を発表し、新増設の届け出件数（敷地面積1,000㎡以上）は43件（前年同期比2件増）、雇用計画人員は1,115人（同477人増）だった。新増設の内訳は新設21件（同3件増）、増設22件（同1件減）だった。地域別では県中が13件で最も多く、会津8件、相双7件、県北6件、いわき5件、県南4件と続いた。

27日

《県内観光客入り込み数3.4%増》

2018年の県内の観光客入り込み数は5,633万6千人で、前年に比べて184万2千人（3.4%）増加したと県が発表した。観光種目別で見ると、2018年3月に伊達市にオープンした道の駅「伊達の郷りょうぜん」が新たに調査対象となり130万人を集めるなど、道の駅を含めた「その他」が1,410万9千人と最も多く、全体の25.1%を占めた。

29日

《秋・冬観光キャンペーン10月スタート》

県観光復興推進委員会は、10月から来年3月まで開催する「『福が満開、福のしま。』ふくしま秋・冬観光キャンペーン」の概要を発表した。「絶景」「食と日本酒」「歴史・サムライ」「温泉」をテーマに、50の特別企画を含め県内全域のイベントや名所などを売り込む。東京オリンピック・パラリンピックを見据えた観光キャンペーンの集大成とし、観光誘客を加速させる。

31日

《福島駅前「ホテル辰巳屋」が営業終了》

福島市初の近代的な都市型ホテルとして1973年JR福島駅東口に誕生して以来、県都の発展を見守ってきたホテル辰巳屋が営業を終了した。同ホテルが入居する辰巳屋ビルは、駅東口の再開発事業で取り壊すことが決まっており、跡地を含む再開発の計画エリアには商業施設やホテル、マンション、同市が整備する交流・集客施設など複合施設が建設される計画となっている。